

浄瑠璃・世話物

「女殺油地獄」

◎初演 享保六（一七二二）年七月十五日 竹本座

目の前は油の地獄「諦めて死んで下され」

あらすじ

上之巻

（道行水馴竿〜寢屋川徳庵堤）

天満の油屋河内屋の不良息子

与兵衛は、野崎参りの道中、なじみの遊女をめぐって、はでなけんか騒ぎを起こし、通りかかった高槻藩の侍へ無礼をはたらく。が、その始末を侍のお供をしていた伯父の山本森右衛門につけてもらう。それを見かけた、河内屋の筋向いに店を構える油屋豊島屋の女房お吉は、与兵衛の汚れた衣服を洗ってやるなど世話をやく。

中之巻（河内屋）

与兵衛は、義父徳兵衛が手代上がりで、義理の息子たちに甘い

のをいいことに、今日も野崎参りでの一件を種に、金をだまし取ろうとしたり、妹おかちに芝居をさせ、自分をあと継ぎにしようとしたり画策する。が、それが通じないと見ると、父や妹を足でけったりする。実母おさわは、そんな勝手きままな息子に、勘当を言い渡す。

下之巻（豊島屋しんまちびぜんや新町備前屋しんまちびぜんや曾根崎新地花屋しんまちびぜんや豊

島屋）勘当され借金で首のまわらない与兵衛は、豊島屋を訪れ、お吉に「金を返さないと親に迷惑がかかる」と借金を頼む。が、「夫の留守中には無理」とすげなく

断られた与兵衛は、隠し持っていた脇差を手にお吉に迫る。油まみれで逃げ惑うお吉、追う与兵衛……。このお吉殺しは五月四日の夜のこと。

見どころ

けんか・うそ・家庭内暴力・衝動的殺人・盗み……この作品の主人公与兵衛が次々としでかす事件を、テレビ番組の評論家ならば、「親に甘やかされて育った青年が犯す、場当たりのな犯罪」とコメントするかもしれません。実際それらは、古典の物語と言うより、現代の新聞や週刊誌の三面記事に似ています。そのせいか初演後、長く再演はなく、明治になって坪内逍遙つばうちしやうようや研究者などに注目され、一気に人気作となりました。近年、歌舞伎では、片岡孝夫（現仁左衛門にざえもん）が、ワルながらどこか放つてはおけない繊細な与兵衛像を好演し、当たり役となりました。またテレビドラマや映画の世界では、松田優作や堤真一などが、独自の与兵衛にチャレンジ。三百年近くたった今も、アーティストたちの興味をかき立て続ける近松最大の異色作です。

